

## 2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所属	社会学部	産業関係	学科
担当科目	産業関係論 (1) 石田先生		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

(仕事内容) 主に、(1) 授業への出席、(2) グループディスカッションの司会進行、(3) 受講生への個人的なフォローといったものでした。

(気づいた点) 受講生への個人的なフォローを通じて、信頼関係を構築することが大切であると感じました。最初の頃、受講生 (主に 2 回生) は緊張してグループディスカッションでも元気の無い人が多かったと思います。しかし、何度か授業を経るうちに意見を交換しやすくなっていったようで、グループディスカッションでも質問などが飛び出すようになり、やりがいを感じました。

受講生からの質問内容を振り返ってみると、産業関係学の議論をするための下地となる日本の近現代史や政治経済に関係する知識が多く、そうした分野の知識を覚える必要があるのではないかと感じました。

(感想) 産業関係学は実践的な学問です。3 回生のゼミ活動や就職活動を終えた段階で再び講義に参加することが出来たため、2 回生の頃とは違った視点から切り込むことが出来ました。新鮮な体験です。

講義中、石田先生からは産業関係学の話題だけではなく、石田先生の体験談などを織り交ぜながら、「議論すること」、「自ら考えること」の大切さを伝えるメッセージが発せられていたと思います。

講義はある意味「きっかけ」作りだと思います。大学は自由である分、毒にも薬にもなりますが、講義で刺激を受けた事をきっかけに努力することは素晴らしいことだと思います。周囲の人々の心を動かし、特に年下の受講生同士の議論を促すことが出来るよう、チューターである自分も努力せねばならないと思いました。実際に、グループディスカッションの場で自分が産関で学んだことを受講生に説明することが出来たときは嬉しかったです。

また、欠席した学生へも、何らかのフォローが出来れば・・・と思うこともありました。

<今後のチューターまたは先生への提案>

チューター制度を定着させ、効果を発揮させるためには受講生とチューターとの関係がとても大切であると思います。講義の最初に、チューターによる自己紹介などがあっても良いと思います。

また、この手のチューターは、学部生がやる場合には「自主性」を重んじた方が良いのではないかと思います。理想論かもしれませんが、教授、チューター、受講生の信頼関係で成り立っている以上、学部生への報酬を減額することや完全にボランティアとしても構わないのではないかと思います。

## 2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	産業関係	学科
担当科目	産業関係論		

### <春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

私は同志社大学に入学してから 60 近くの講義を受講した。その中で、自ら必死で本を読み、講義の内容について友達と議論しあった講義の数は片手で収まるほどである。少人数のゼミや実習を除くと、石田光男先生の産業関係論だけだ。難解なテキスト、分かるようで分からない先生の話、決して答えを明言しない、分かるまで本を読み、考えろ、悩み苦しめというのが石田先生のスタイルだ。同志社大学に入学してからというもの、テスト前になると先生が懇切丁寧に模範解答さながらのヒントを教えてくれる。講義ノートとレジュメのコピーさえ集めれば単位を取ることは楽勝だったので、石田先生のスタイルはかえって新鮮だった。分からないことに焦りや悔しさを感じ、わくわくしたのは大学に入って初めてだった。欠片でもヒントが欲しくて、先生の表情や声色まで食い入るように注目した。自ら難解なテキストを読み、それでも分からないところは友達と議論しあった。私だけではなく、この講義を履修したほとんどの学生がそういう苦勞をしていた。そして、期末テストが終わる頃には、多くの学生が「石田先生の授業って意外と面白いよね」と口にする。今年、チューターとしてこの授業に関わったが、その風土は今も同じであった。

少なくとも同志社大学に入学してくる学生は、大学受験の段階で標準以上の読み書き計算、考える力を身に付けている。悪問だらけの泥沼化した就活市場でそれなりの評価を得ているのだからコミュニケーション能力も低くないはずだ。ならば学生は能力が無いのではなく、それを発揮していないだけだ。何もしなくても「答え」が転がり込んでくるのが大学の講義の現状なのだから、知りたい、分かりたいという欲求が沸くはずも無い。

この教育 GP では、専門的知識を学ぶだけでなく、実社会の中で新しい知識を自ら生み出し活用する能力のことを創造的学力と定義し、その育成を目的としている。そして、チューター制度によって学生が相互に啓発しあえる集団を講義に取り込むことで、“一方的な「教え」から主体的な「学び」へ展開する”としている。この一文の解釈を誤ってはいけない。学生の主体的な「学び」は、あくまで一方的な「教え」から展開されるものなのだ。石田先生の教育スタイルは昨今の風潮から見れば極めて“一方的”だろう。しかし、そこではそもそもチューター制度なんて必要ないくらい、学生の自発的な学びや議論の輪が既にできあがっていた。しかし、昨今の大学教育の方針は、一方的「教え」と自発的「学び」は対極であり、一方的な教えは無責任だ、学生の主体性を低下させると言わんばかりだ。

私は、今日の大学教育に欠けているのは一方的「教え」を貫く覚悟だと感じている。サービス業でも就職予備校でもない大学が、国や企業の言動に振り回され、学生の居心地の良さや環境ばかりを満たそうとしていることに違和感を覚える。同志社の教育に物足りなさを感じている学生は少なくないはずだ。学生が相互啓発し合える環境を整えるという表面的な策を講じる前に、大学のあるべき姿について問い直すべきだと思う。

## 2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	産業関係	学科
担当科目	産業関係論(1) 石田光男教授		

### <春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

この産業関係論(1)の仕事内容は、

- ① 試験の前週に行われるグループディスカッションの進行。
- ② 通常の授業時は他の学生と一緒に講義を受けその後質問などがあれば個別に対応する。

以上の2点が主な内容である。

グループディスカッションに関して感じた点は、われわれの時よりもしっかり議論できていたということである。本をしっかりと読んできているなどは別として、しっかり議論に参加しようとしていたのがよくわかった。しかしながら、中には議論参加しない・まったく勉強しない・やる気が見えない学生も多数おり、その点に関してどのような声をかけたりできるのか間がタリする時間があればと感じている。

私は石田ゼミに所属しており、ひよんなことからこのチューターへ参加しないかと石田先生からお声をかけられた。私も2回生と議論してみたかったし、もう一度石田先生の講義を受けてみたいと思い、このチューターを引き受けた。これが5月初旬の話である。そして、チューター業務2回目で、いきなりのグループディスカッションで緊張したが、難なく業務ができ満足している。

このチューター業務を引き受け、現在の2回生と話す機会ができ本当に満足している。下記は自己満足かもしれないが、2回生から4回生でここまで成長できるのかということが実感できたことは大いに嬉しい。議論に対する姿勢や、知識の量はやはり2回生時よりも格段に進歩していることがわかった。われわれも2回生時に、このようなチューターと議論できるような授業があれば、非常成長するのも早いかもしれない。

この学期から産業関係文献演習にもチューターが業務に当たっているようだ。このような少数でのチューターの存在は非常に大きいと思うので、今後も大学はこのチューターを大切に制度化して欲しいと思う。

### <今後のチューターまたは先生への提案>

学生相互チューターリングシステム内での■■■■君の議論に関して、私は非常に賛成です。私も、授業報告に関しては申し訳ありませんが遅れて投稿していました。やはり、少しばかり形式的になり、議論の余地もできませんでした。このような形は本来の趣旨から少し離れている気がします。

山根君が、主張している謝礼なしでもその対価はしっかりとあるはずですが、私も、謝礼なしでもやっていきたいですし、この投稿に関しては自主的に行うようにしたほうがよいのではと考えています。

参考アドレス([http://ssgp.doshisha.ac.jp/ssgp\\_tutoring/tutorMember/reportView/id/234/mid/64](http://ssgp.doshisha.ac.jp/ssgp_tutoring/tutorMember/reportView/id/234/mid/64))

## 2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	産業関係	学科
担当科目	産業関係論		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

### ☆ 仕事内容

授業に出席し、グループディスカッションをする際に、学生の間に入る。  
また、テスト時には問題などを配布する。

### ☆ 気づいたこと、感想

グループディスカッションに入ったとき、全く議論が進まない場合(授業内容が理解できていなくて)や、下回生から“先生”として「答えこれであっていますか」と聞かれたときなど、どう対応したらよいかかわからないことがたくさんありました。

ただ、最終的には、「私も分からない。」と言いながら、一緒に考えることが大切だと思いました。大学の授業は、高校までのようにある決まりきった解答に辿り着かなければならないわけではないし、私たちチューターが、家庭教師などのように答えを導こうとすれば、それはただの答えの押し付けになってみんなの考える機会を奪ってしまったり、逆に混乱させてしまうだけだと感じました。

解答を教えてもらって、肩肘をはって、グループディスカッションに臨むより、例題の答えを自分もよく知らないままでグループディスカッションに出て、みんなと一緒に考える方が、やりやすかったです。

また、チューターが出来て、色んな面(勉強、人脈…etc)において、本当に良かったなと感じています。

ただし、普段は授業を聞いて、ディスカッションのときだけ前に出ると感じるなので、普段から積極的に下回生の子に関わっていくとか、何か出来ることはないかと自分から動くなどする必要があったと思います。そうでないと、少しもの足りないです。

それから、謝礼のことが分かりにくかったです。

<今後のチューターまたは先生への提案>

☆ 他の教科のチューターがどんなことをしているのか知りたいです。

☆ 活動報告などについて、先生からのコメントなどが要求されているようですが、あまりそういったところまで面倒をみてもらうと、なんだか手取り足取りすぎて、逆に教授(研究者、学者)が先生(小中学校のように世話?してくれる人)化するような気がします。私は、春学期の石田先生のように、活動報告にまでは関わらない感じでも、十分だと思いました。